

## 〈われわれ〉の価値としてのイスラム

八木久美子

### 一. アメリカという〈他者〉

先日、カイロでタクシーに乗ったときのことだ。人懐こいことで有名なエジプト人は必ずといっていいくらい、どこから来たのかと尋ね、アラビア語が通じるとわかると、いろいろと話しかけてくる。日本から来たと答えた私に、「日本はいい。ナンバーワンだ」とお決まりの社交辞令を言った後、その運転手はこう続けた。「アメリカはよくない。ヨーロッパ諸国もよくない。フランスは、まあましだ。」こうした言葉がタクシーの運転手、つまり特に政治に関心があるわけでもない普通の人々の口から出たことは、これまでにはあまりなかったと言って良い。アメリカという国はこれまでにないほど、負の意味を帯びているようだ。

エジプトのみならず、アラブ・イスラム世界の人々にとって、アメリカが否定されるべき存在の代表、〈他者〉の代名詞となる背景に、その外交政策があることは間違いない。それは西洋近代がもつとも悪しき形をとったものと認識される。ただここで問題としたいのは、アメリカが批判されるにいたる経緯ではなく、〈他者〉たるアメリカについていかなる像が結ばれ、さらにそれを受けて形成される〈われわれ〉の像はどのようなものとなるかという点である。その際、〈われわれ〉

の価値として、イスラムがどう理解されているかが重要になる。

改めて指摘するまでもなく、〈他者〉・〈われわれ〉とは関係性の上で成り立つ概念であり、〈他者〉という概念は〈われわれ〉なしにはありえず、〈われわれ〉という概念もまた〈他者〉なしにはありえない。誰かを、何かを、あるいは何らかの特定の要素を排除することによってのみ、〈われわれ〉は定義されうる。だとすれば、〈われわれ〉の集団に〈他者〉が何らかの形で浸透し、両者の境界線があいまいになるということは、〈われわれ〉という集団の存亡の危機であるということになる。ここにグローバル化の問題が絡んでくる。今、問題にしている〈他者〉とは、どこか遠くにいる、何の関係も持ちえない、見知らぬ人々ではない。そうではなく、間接的な接触を通してであれ、何らかの形で〈われわれ〉に大きな影響力を振るう存在である。その像を裏返したものが、そのまま〈われわれ〉の像となる。

本論では、エジプトの事例に焦点を当てる。イスラム世界は地理的に広大であるだけでなく、歴史的な背景も驚くほど多様であり、ひとつの国で起きていることを挙げて済ますことができないのは言うまでもない。しかしエジプトは、アラブ・イスラム世界の文化的中心であり、その意味で西洋近代と最前線で接してきたことは事実であり、またその一方でエジプトは、アズハルというイスラム諸学の最高学府を抱え

ることによって、常にイスラーム世界の学問的中心であったという歴史を考えると、そこで起きていることは、イスラーム世界全体の状況を考察する上での少なくとも手がかりとなることに間違いない。

以下に、「アメリカ」をキーワードにした三つの素材を使って、考察を行う。はじめに、イスラーム主義の代表的な理論家、サイイド・クトゥブ（一九〇六—一九六六）の書いた『私の見たアメリカ』という旅行記を取りあげ、アメリカがクトゥブによっていかに描かれているか、そしてイスラームが「アメリカ」と対抗する価値として、いかなる意義を持つと認識されるにいたったかをたどる。次に、クトゥブとは政治的にはまったく異なる立場、いわゆる世俗主義的な立場をとったときされる作家、ユースフ・イドリース（一九二七—一九九一）が自らの訪米体験を基にして書いた『ニューヨーク八〇』という中編小説を取り上げて、クトゥブとの比較を行う。そして最後に、一九九八年にエジプトの映画史上、記録的な成功を収めた大衆映画、「アメリカ大学のサイデー」を取り上げ、民衆のまなざしから見た「アメリカ」的なもの、および〈われわれ〉の価値とされるものを拾い上げてみたい。

## 二、転機としてのアメリカ留学—クトゥブの場合

はじめに、サイイド・クトゥブについて簡単に紹介しておこう。彼はすでに述べたように、イスラーム主義の代表的な理論家であり、彼の代表作、『道標』（一九六四）は現在に至るまで、イスラーム主義、つまりイスラームの理念に従った国家、あるいは社会の建設を唱える人々にとつて、いわゆるバイブルのような位置を占めている。しかしながら注意

しなければならぬのは、イスラーム主義者の代表と考えられているクトゥブが、最初から一貫して政治化したイスラームを心に抱いていたわけではないという点である。青年時代の彼は文学に関心を持ち、自ら作品を発表もした。<sup>2</sup> リベラルな立場で知られる、ノーベル賞作家ナギーブ・マフフーズとも親しくしていたところか、まだ無名の作家であったマフフーズの才能を誰よりも早く見出したのは、クトゥブであつたとされている。西洋近代の産物である小説という文学形式によって自己を表現しようとする行為自体が、（少なくとも伝統的な形の）イスラームから一歩、身を引き離すことを意味したことを考慮すると、彼こうした過去は意外なものと思えるだろう。

クトゥブにとつて大きな転機となつたのは、一九四八年から一九五〇年の二年間にわたるアメリカ留学であつた。<sup>3</sup> 当時、教育省に勤めていた彼は政府から命じられアメリカへ向かうのであるが、一九四八年から一九五〇年といえば、まさにイスラエルが建国され、パレスチナ問題がアラブ・イスラーム世界の人々の間で関心の的となつていたところである。アメリカのイスラエル支持は、周知の事実であつた。

二年後、帰つてきた彼は大きく変わつていた。渡米以前から彼はアメリカに批判的であつたとはいへ、それはアメリカの外交政策に対するの批判であつた。しかしながら帰つてきた彼は、アメリカ社会そのものを否定するようになっていた。彼が見たアメリカは、効率性と生産性の高さ以外、なんら誉むべきところのない、哀れなほどに人間性を失つた社会だつたのだ。彼は帰国後、反米的な姿勢を鮮明にし、イスラームを「アメリカ」的なものへの対抗策と見るようになった。<sup>4</sup> クトゥブは、留学中の見聞を帰国後、エジプトの雑誌、「アル・リサー

ラ」で発表している。これは一九八五年にアル・ハーリデーによって、解説を添えた形で、『サイド・クトゥプの目を通した、内側からのアメリカ』という一冊の本に収録されなおしているが、この本がすでに第八版であることから、アメリカについてのクトゥプの言説が今もなお持っている影響力の大きさを理解することができる。『私の見たアメリカ』から一部を見てみよう。

#### 〈アメリカにおける性の原始性〉

アメリカ人は性生活において、そして婚姻関係、家族関係において原始的である。私は旧約聖書を勉強していたとき、「創世記」のなかに、神による人間の最初の創造の物語に関する章を見つけた。それは「男と女として彼らを創造した」という章である。私のこの章句に何度も出会ったが、その意味はアメリカにいた時ほど、あからさまな形で私の前に立ち現れることはなかった。

#### 〈性と腐敗〉

人間の長い歴史がその創造と維持に懸命になったのは、性に関する道徳であり、こうした（婚姻・家族）関係の周りに生み出したのは感情や感覚であって、そして闘いの対象となったのは感性の粗野さと本能の陰鬱さである。それは、個人の感情の中に、家族生活の中に、そして社会という大海の中に、揺らめく光線と羽を得たオーラ、そして束縛のない希望、そしてこれらの関係の周囲に広がる強固な絆をすべて解き放つためである。

こうしたことがすべて、アメリカでの生活では一挙になくなってしまふ。それには何の美化の要素もなく、むき出しのままである。（男も

女も）最初に創られたままだ。肉体対肉体。男対女。肉体の欲求と衝動に基づいて、関係が成り立ち、つながりが決定する。そしてそこから行動のルール、社会の道徳、そして家族と個人のつながりが導き出されるのである。

あらゆる覆いを取り除かれ、いかなる羞恥心もなく、ただ肉体の誘惑のみによって、若い女性は若い男性と出会う。肉体の強さ、そしてその筋肉（の強さ）から、男性は女性の賞賛を引き出し、夫はその権利を引き出す。だからこそ、男が何らかの理由でそれらを失ったとき、こうした権利はすべて慣例どおりに消えてく。

#### 〈アメリカ女性の誘惑という現象〉

アメリカの女性は、自分の肉体的な魅惑のありかをよく知っている。顔の中に、もの言いたげな目に、そして渴いた唇にあることを知っている。肉体のどこに魅力があるかをわかっているのだ。突き出した胸、丸みを帯びた腰、ふくよかな腿や滑らかなすねに、魅惑の源があることを知っている。彼女はそれをすべて露わにし、隠そうとはしない。服装に関しても、よく知っている。原始的な感覚に訴えるような派手な色、肉体の魅力的な部分を際立たせるような仕立て方の中にあることを知っているのだ。――時としてアメリカ女性の中には、ほんとうに叫ぶような生命力に溢れた魅惑がある。――それだけではない。彼女はそれに気を引くような笑い声、あからさまな視線、大胆な動きをつけ加える。こうしたことを瞬時も無視したり、忘れたりしないのだ。

#### 〈アメリカでは性の問題は生物学的な問題〉

このようにして、bashfulという語、つまり恥らう、恥ずかしがり

という語は、(アメリカでは)不名誉なおぞましい言葉の一つになった。性的な関係は、ジャングルの掟どおり、あらゆる束縛を解き放たれたのである。なかにはそれについて考察している者もいるが、ある時、大学でひとりの女性が私に言ったものだ。「性の問題というのは、まったくもって倫理的な問題ではないわ。それは純粹に生物学的な問題よ。そういう角度から見ると、卑しいとか素晴らしいとか、善いとか悪いとかという言葉を使って、性の問題を扱うのは的外れだということがわかるのよ。そんなことをするなんて、私たちアメリカ人には奇妙に思えるどころか、笑ってしまいわ。」他には、たとえば博士号を取るために勉強している、ある学生がしたように、次のように説明、理由付けしようとする者もいる。「ここではみな、仕事で忙しいんだ。何にも邪魔されたくない。感情に費やしている時間なんてない。抑制は神経をすり減らすしね。こんな厄介な問題は措いて、神経を落ち着かせて仕事に打ち込みたいのさ。」

#### 〈アメリカ人の神経〉

ここでこの話にコメントするつもりはない。私の関心は、彼らがこの問題についてどう考えるかだ。しかし、アメリカでは、落ち着いた神経を示しているものなどない。快適な生活の手段がいろいろとあり、あらゆる形の保証があり、余ったエネルギーを使う簡単な方法があるというのに。

#### 〈アメリカ人は人間性を欠く〉

彼らの中にはこれを欺瞞からの自由、あるいは現実の直視と呼ぶ者もいる。しかしながら、欺瞞からの自由と、人間と動物の区別となるような人間性からの自由との間には、根本的な違いがある。たしかに

人間はその長い歴史の中で、性的な関心が自然で正当なものであることを無視はしてこなかった。しかしながら、性的な欲求への隷属から逃れ、かつその低い次元から離れるために、意識的に、そして無意識のうちに、性的な関心を制御しようと懸命に闘ってきたのである。

然り、それは必要なものである。しかしなぜ、人間はその必要なものを顕わにすることを恥じるのであろうか。なぜなら、この必要なものをコントロールすること、それこそが隷属状態からの解放の証明であり、人間性の階段の最初の一段であることを人間が本能的に感じ取っており、ジャングルの自由に戻っていくことは仮面をかぶった隷属状態、最初の原始的な段階に後退していくことに過ぎないと理解しているからである。<sup>7</sup>

クトゥブはアメリカについて語るとき、繰り返し、「原始的 *Primitiv*」という形容詞を使う。よりなじむ日本語にするとすれば、「野蛮な」といったところだろうか。『私が見たアメリカ』全体を見ると、彼がアメリカにつなげたのは、「原始(性)」、「粗野」、「動物」、「肉体」、「物質」などの概念であり、アメリカに欠けているとしたものは、「道徳」、「羞恥心」、「感情」、「精神」、「抑制」等である。つまり、彼が見たアメリカ人とは、動物と大して変わらない原始人のような人々であり、歴史上の原始人と異なるのはただ、彼らが優れた道具、機械を持っているという一点に過ぎない。豊かな感情を持たず、物質的な欲望にのみ駆られ、中でもその性の放埒さは人間を動物の域にまで貶めるほどだとされる。結論として、そのような劣った人々が世界を支配することが、人類全体にとつていかに不幸なことであるかが訴えられるのである。

では、いったいこうした「アメリカ」の対極にある社会とはどのような社会なのか。彼は先に挙げた『道標』に収録された「イスラムこそ文明」というエッセーの中で次のように書いている。

「家族」が社会の基盤であるが、家族というものは夫と妻の間の仕事の「役割分担」に基づいている。これからの世代を育てることは家族の最も重要な機能であり、そのような社会は本当に文明化している。こうした家族は、——イスラム的な方法によって——先の節で私が示したような「人間的な」価値や道徳が次の新しい世代の中で発展し成長するための環境となる。これらの価値は家族という単位を措いては存在し得ない。また他方で、(いわゆる自由な)性関係と(非合法的)生殖が社会の基礎になり、両性の間の関係が欲望、欲求、衝動に基づき、そして家族の中での役割分担や義務に基づかないというのであれば、そして女性の役割が飾りたてること、誘惑すること、魅惑することであるならば、そしてもし女性が新しい世代を育てるといふその基本的な任務から離され、ホテルにおいてであれ、飛行機であれ、船の中であれ、接客員なることをより好むのであれば、——かつ社会もその方がよしとするのであれば——、また女性が今日では物質的な生産が「人間の生産」よりもより重要で、より価値があり、より名誉なことであるという理由で、「人間の生産」に自らの能力を使わず、「物質的な生産」と「道具の生産」のために自分の能力を費やすのであれば、その時そこに存在するのは、人間的な視点からして「文明としての後進性」であり、イスラムの用語を用いて言えば「ジャーヒリー性」である。

家族と両性の関係は、ひとつの社会の性格を決める上で、つまりそれが後進的か文明化されているか、あるいはジャーヒリーのカイスラム的かを見極める上で決定的な問題である。動物的な価値、道徳、欲望が支配しているような社会は、文明化された社会ではありえない。産業や科学においてどれほどの進歩を成し遂げているかなど関係がなく、こうした基準こそが、「人間的な」進歩の度合いを測るうえで誤るところのないものである。<sup>8</sup>

ここに、重要な点が明らかになっている。「文明化された社会」とは、本能の命ずるままに動く動物とは一線を画し、物欲や肉欲が支配するのではなく、人と人との関係に抑制を効かせ、人間が豊かな感情を持ちながら生きることを可能にする秩序ある社会のことを言う。そして彼の考えるところ、それはまさに「イスラム的」社会にほかならない。それこそ、「原始的なアメリカ」とは本質的に異なる、〈われわれ〉の社会である。それは男女の役割分担に基づいた家族という単位を基本とし、人間的な価値を大切にしている社会である。そこに生きる女性は、アメリカ女性のように肉体の魅力ある部分を露わにしたりせず、慎み深く、思慮深い振る舞いをする。<sup>9</sup>

上に挙げた文章のなかで彼自身が括弧をつけていることから明らかのように、彼の理解においては、人間性と文明(性)とイスラムが結びつき、動物性と後進性とジャーヒリーヤが結びついている。後者によって「アメリカ」が連想されることは言うまでもない。さらに、このエッセーの中で、クトゥブはおそらく意図的に、「それは後進的な

社会、あるいはイスラームの用語で言えば、『ジャーヒーリーの社会』なのだ』というフレーズを繰り返して挿しはさむ。ジャーヒーリーヤとはイスラーム以前の多神教、偶像崇拜が行われていた時代のことであり、まさにイスラームが否定するものの代名詞であることを考えると、それがいかに大きなインパクトを持つかは容易に想像できる。つまり、彼はアメリカが代表するような人間性に欠けた物質文明を、イスラームの立場からは決して許すことのできないもの、つまりジャーヒーリーの価値であると刻印することによって、それとの闘いをイスラーム教徒の宗教的義務にまで高めている。

### 三、西洋近代の末路―イドリースのアメリカ批判

才能豊かな作家として知られるイドリースの作品としては、『ニューヨーク八〇』は、あまり評価できるものではない。失敗作と言っても言い過ぎではないだろう。しかしその中でアメリカ批判は単純すぎるほどに率直であり、その意味では貴重な材料を提供してくれる。彼もまたクトゥブと同じように、実際にアメリカ社会を見たことが、外交政策を理由としたアメリカへの嫌悪感を拭い去るところか、それをさらに強化し、裏付ける結果になった。アメリカが見せるゆがんだ政治的な振る舞いは、一般のアメリカ人の日常生活における振る舞いと無関係ではないという結論に至ったのである。

作品は、ニューヨークを訪問中のエジプト人作家がひとりの娼婦と出会うことから始まる。大部分が二人の会話によって構成されるこの作品が、イドリースの訪米体験を基にしており、主人公のモデルが彼

自身であることは明らかである。主人公が出会うこの娼婦は、実は博士号を持ち、有名な病院に勤める精神科医だという設定になっており、彼女は金に困って売春をしているわけではない。そうではなく彼女は、最短の時間でできるだけ多くの金を稼ぎ、その金でより優雅な生活を送ることが一番賢い生き方だと考えているのだ。人間の身体および精神の神聖さを信じて疑わないエジプト人作家とこの女性との間には、響きあうものはなにもない。どれだけ話を続けても、二人が理解しあうことはまったくなく、幕切れは、いらついた娼婦が部屋を飛び出すという救いのないものである。

効率のよさこそ、物質的な豊かさこそ、人間を幸せにするという自らの信念を雄弁に語ってみせる娼婦に、主人公の作家が投げつける言葉はこうだ。

「あなたはまだ、自分にも何らかの考えがあると信じ込ませたいのですか？あなたの言うことを聞いていて恐ろしくなるのは、そのなかにある種の恐ろしい崩壊があるのが私にはつきりとわかるからです。あなたたちの文明とは言わない。この文明、いやどの文明でも最も大切なものは女性です。あなたのような女性は、精神的にも知的にも哲学的にも破壊者です。僕を驚かせるのは、あなたのような女たちが客の男を見つけることができることです。男と女の関係が原始的な、汚い売買の段階をとくに超えていて、抜きん出ているとされている社会に育った男たちなのです。…二十世紀の後半に世界でもっとも秀でた国に暮らす男がいたいどうやって女性を、女性の肉体を、当の女性の感情を無視して自分のものにするかなどできるのでしょう

か。内も外も裸になることを受け入れるがための代償が、男が代金として払う何ドルかなんです。僕は、科学を進歩させ月まで到達しながら、身体に関しては奴隷の感覚に沈んでいるような文明は嫌いです。そして、あなたのような女性には嫌悪感を覚えます。」<sup>10</sup>

作家がこの娼婦を前にして思い出していたのは、祖国エジプトの娼婦たちだった。彼女たちがいつもバッグに入れているのは、このニューヨークの娼婦とは違い、最高級の香水ではない。彼女たちがいつも、バッグに忍ばせているのはヨードチンキの濃縮液だったのである。それは万が一、警察に捕まったときにその場で飲むためのものだった。飲んで死に至れば、身元が明かされることなく卑しい生活から永遠に解放されるし、生き延びたとしても、病院に入れられて寝る場所と食べ物を保証され、汚い男の体から自由な幾日かを送ることができれば幸運だと彼女たちは考えていた。彼女たちは何が正しいか、どう生きるかとが人間としてあるべきかを分からず、売春をしていたのではない。ましてや、ニューヨークの娼婦のように売春を効率のよい商売と得意げに語ってみせなどしない。彼女たちは自分の生業を恥じながら、しかし生きていくためにしかたなく身を売っているのである。恥じるということで、彼女たちは人間としての最低限の尊厳を守っている。

イドリースは、クトゥブとは世代も違えば、政治的な立場もまったく異なる。それを考えると、彼がアメリカに対して見せる拒絶感が、クトゥブのそれと似ているのは驚くほどである。アメリカについて「原始的」という言葉を使うだけでなく、アメリカ人を「恥を知らない」人々として、彼は、彼はこうした「アメ

リカ的」価値に対抗するものとして、どのような期待をイスラムに寄せるのであろうか。『岸のないイスラム』に収録された「イスラムの科学と西洋の科学」というエッセーのなかで、イドリースはイスラムについて次のように記している。

科学というものは、科学それ自体のほかに何か目的がなければ、愚行か不正になる。科学のための科学、生から切り離された知識の肥大は、人間の持つ他のすべての次元における収縮をひきおこす。つまり、愛情、創造、生の不可視の部分についての考察、私たちと自然との関係、および私たち同士の人間的な関係において調和と均衡を保とうとする意志、といった次元が収縮するのである。

タウヒード（神の唯一性）の原則は、科学と信仰の間の隔たりを埋めた。自然のなかにあるものはすべて、神の存在の徴である。自然を知るといふ行為は、一種の礼拝と同じであり、神に近づくための道である。<sup>11</sup>

豊かな精神性をイスラムならではの価値として強調する点では、イドリースはクトゥブと変わりない。しかしイドリースが考えるイスラムは、男女の役割分担というところにはつながらない。実際、彼はしばしばエジプトにおける女性が男性ほどに自由を享受していないことを批判的に指摘しており、女性に対して宗教規範の遵守をとりわけ厳格に求めることなどまったくない。だからこそエジプトの娼婦たちは、否定されるべき対象としてではなく、社会的矛盾の最大の犠牲者として扱われ、そして惨めな境遇に身を置いてもお人聞らしさを失わな

いという意味で「イスラーム的」人間の例として敬意を払われるのである。二人が頭に思い描く「イスラーム」的社会的姿には、かなりの違いがある。「アメリカ的」価値に対抗するものとしてイスラームを見るという点に関しては、二人は同じでありながら、その先にイスラームに託すもの、そして〈へわれわれ〉の価値として具体的にイメージするものはかなり異なっている。

#### 四 大衆の見る「アメリカ」―映画に現れる「アメリカ」的なるもの

次に、クトゥブやイドリースのような知識人ではなく、いわゆる民衆の間では、どのようなイメージがアメリカについて結ばれているのかを見てみたい。ここでは素材として、エジプトの大衆映画を使う。エジプトに限らず、一般的に商業的成功を義務づけられている映画の場合、大衆の嗜好を考慮に入れないわけにはいかない。たしかに映画という媒体が、新しい情報や視点を提供することで、観客が持つていた偏向した見方を正すことがないわけではない。しかしながら、それよりもはるかに、観客が信じているものの正しさを確信させる作品の方が娯楽として好まれる以上、そうした作品の数の方が多くなるのは避けがたい。こうして大衆映画というものは、観客がすでに獲得している視点や情報から大きく外れることがなく、人々はこれらの映画を見ることよって自らの視点や情報をさらに確認、強化していくという循環が生まれる。このような意味で一般に大衆映画というものは、他のいかなるメディアよりも大衆に近いと言えるが、エジプトのように識字率がまだ低く、文字媒体が限られた影響力しか持ちえないこ

とを考えると、なおさらその重要性は大きい。

先に紹介したとおり、「アメリカ大学のサイーディー」は一九九八年秋に封切られ、記録的な成功を収めた作品である。数日前にチケットを買わないと入れないほどの盛況ぶりは、映画が人気のある娯楽であるエジプトでも異例のことであった。この映画のつくりは、従来の大衆映画と本質的には変わらない。笑いを買うような振る舞いを繰り返す、どこか愛嬌のある主人公がおり、彼を支える友人たち、そして彼を潰そうとする悪役が登場し、また物語に花を添える恋物語の要素が絡み、観る者を飽きさせないよう、歌や踊りが盛り込まれる。ただこの作品が従来のコメディと違う点があるとすれば、それはこの作品がコメディでありながら、エジプト人が共有するひとつの怒りを率直に描いて見せ、それによってそれまでの大衆映画では得られなかったような一種の解放感を観客に与えたという点である。その怒りとはパレスチナ問題と結びついた形での「アメリカ」に対する怒りであり、さらに上流階級の間に見られがちな軽薄なアメリカかぶれに対する怒りでもある。この映画の成功の鍵はまさに、一般のエジプト人の観衆が抱いていたこの感情をみごとに表現して見せたところにあると言っても過言ではないだろう。

サイーディーとは、エジプトの南部、いわゆる上エジプト出身の人のことである。作品の冒頭部に、主人公の青年ハラフの暮らす農村が登場するが、それは限りなく続く広大な農地であり、美しい花の咲き乱れる牧歌的な風景である。続いて、これからカイロという大都会の大学へ勉強に行くハラフのための村を上げての送別会に場面が変わり、都会の住人とはまったく異なる村人たちの伝統的な服装、振る舞いが



画面に映し出される。サイーデーという言葉には、たしかに侮蔑の響きがないわけではない。田舎者、無骨者という意味合いが含まれることは確かである。成績優秀であるがゆえに奨学金を手にした息子を自慢するハラフの父親は、CNNの番組を村人とともに見ながら、ハラフにはこの言葉がわかるのかと訊かれ、こう答える。「彼は七ヶ国語できるんだ。えーと、英語とフランス語とイタリア語とアメリカ語とイギリス語とチェコスロバキア語とそれから…」この父親にとつては、カイロに行くことすら一大事なのであり、彼は外の世界については何も知らないと言つてよい。<sup>12</sup>

しかしながらその一方で、ハラフの父親をはじめとする村人たちの姿は、CNNに象徴されるアメリカの圧倒的な力がエジプトの隅々まで浸透しようとしているにもかかわらず、エジプトには今もなお、自分たち独自の価値観にもとづき、地にしっかりと根を張つて生きている人々がいることを示している。父親は周囲の人々に信頼され、敬意を持つて扱われていること、そして彼の周りに家族を中心とした強固で暖かな人間関係が取り結ばれていることが、いろいろな場面で、繰り返し観客に伝えられる。そこにはまさに、他のいかなる文化にも染まらない、エジプトならではの世界があるのである。主人公ハラフは、都会に出て失敗を繰り返す単なる道化として登場するのではなく、彼が起す騒動のひとつひとつが、都会で起きている歪みの所在を明らかにする役割を果たしている。

物語は単純である。成績が優秀であったために主人公は奨学金を手に入れ、エジプト随一のエリート大学、カイロ・アメリカ大学で政治学を学ぶことになる。<sup>13</sup> この大学は、国立のカイロ大学とは異なり、もつ

とも優秀な学生が集まると言うよりも、もつとも裕福な家の子弟が集まる場所である。カイロ大学が原則的に無料であるのに対して、アメリカ大学の授業料は平均的な家庭の年収をはるかに超える。授業は英語で行われ、カリキュラムもアメリカの大学に倣っている。首都カイロのほぼ中心に位置するこの大学が、一般のエジプト人にとつて、他から切り離された異質な空間、小アメリカと感じられているのは確かだ。映画のなかほど極端ではないが、現実にも、カイロ大学の女子学生には髪をベールで覆う者が多いのに対して、アメリカ大学ではそうした姿の学生は比較的少なく、ジーンズにTシャツといったカジュアルな服装の学生が大半である。

カイロにやってきた主人公のハラフは、アメリカ大学という新しい世界に受け入れられようと、故郷で着ていた伝統的な服を捨て、黄色のスーツに身を包み、アタッシュケースを持つて、意気込んでキャンパスへ向かう。しかし他の学生たちは、まさにアメリカの学生のようにカジュアルな服装をしており、彼のいでたちは嘲りの対象にしかない。なんとか「アメリカ的」な世界に溶け込もうとする彼の試みはことごとく失敗する。彼の言動の一つ一つが、彼が田舎者であること、そして彼の信じるものがいまやカイロでは忘れ去られようとしている昔の価値であることを明らかにしてしまうのだ。<sup>14</sup> だから、彼が一目ぼれた美しい女子学生アブラは、彼など相手にしない。彼女は「アメリカ国籍を持った」助教と恋仲になり、婚約してしまう。同じアパートに住む同郷の友人に助けられてようやく手に入れたカジュアルな服も、高級車でドライブに誘う助教と競い合うために、父親に頼んで買ってもらった車も、結局は何の役に立たなかった。

この「アメリカ国籍を持った」助教授というのが、まさにハラフと対照をなす人物である。彼は田舎者のハラフと異なり、服装も身のこなしもスマートで、女子学生の憧れの的である。最初の授業で自己紹介をするとき、「生まれはエジプトだが、国籍はアメリカだ」と言うと、女子学生の間でため息が漏れる。

しかし最終的には、この助教授とハラフの関係は逆転する。その契機となったのは、パレスチナ問題をめぐっての学生の抗議集会での出来事であった。<sup>15</sup> アフマドという政治的意識の高い一人の学生は、いつもこの助教授に、アメリカ人なのかそれともエジプト人なのかと問い質していたが、まさにその忠誠心の危うさが露呈することになるのである。アフマドら学生たちが配ったビラには、当然のようにアメリカへの厳しい批判も含まれていた。緊迫した空気の中、教授陣をはじめ大学側は集まった学生たちを見つめているが、ビラを手にし、その内容を知ったこの助教授は、抗議集会を止めさせようと大学側スタッフの間を走り回る。うろたえ、慌てふためいたこの助教授の姿は、あまりにも情けなく、滑稽でしかない。一方、集会でリーダー的役割を果たしているアフマドは、白い布に青いペンキでダビデの星を描き、即席のイスラエル国旗を作る。そしてあたかも闘牛士のように挑発的に、それをたたかす。そのとき、警備の人間が襲い掛かり、アフマドは後方にいたハラフにその旗を投げ渡す。ハラフがとつきに取った行動は、その旗に火を点けることだった。彼は燃え滓の上で、踊り始める。劇場では、この場面に観客から大喝采があったと聞く。

その後、ハラフは公安から呼び出しを受けるが、彼に特別な政治的背景がないことが明らかになると、無事に釈放される。重要なのは、

彼が自分の行動について、「なぜだか火を点けたとき、ほつとしたんです」と釈明する場面である。実際、ハラフはアフマドとは異なり、それまで特に政治に関心を示すこともなければ、例の助教授を公然と批判するようなこともなかった。彼は突出した存在ではなく、そういう意味で平均的なエジプト人の感情を代表するのであり、その彼がパレスチナ人に対するイスラエルの行為に怒りを感じ、そのイスラエルを支援するアメリカに憤りを禁じえないという点は重要である。イスラエルの旗を目の前にして、ハラフと助教授がそれぞれにとつきに取った行動は、見事に対照的であった。この一件を期に、「アメリカ国籍を持つ」助教授は、学生たちから無視されるようになり、アブラからも婚約指輪をつき返される。

全体としては、ハッピーエンドと言ってよいだろう。最後を飾るのは、学科で最高の成績を収めたハラフが、卒業生代表としてスピーチを行う卒業式の場面である。そのスピーチの中で、彼は次のように言う。自分はアメリカ大学に入学したとき、それまでの自分とは違うものに変わろうとしたが、それは無駄だった。結局、本来の自分のままでいることが正しいのだとわかった。だれも力づくで他人を従属させようとしたり、自分の意見押し付けようとしたりしてはならないと。こうして、暗にアメリカを批判する場面で、この作品は幕を下ろす。

このハラフという人物が「アメリカ的」価値と対抗する位置に置かれているのは明らかであるが、彼にはすぐにそれと判るようなイスラーム的な性格は委ねられていない。彼は厳格なイスラーム主義者であるどころか、アメリカかぶれの学生に誘われて、ビールを飲んでみようという気にもなるふつうのエジプト人青年なのだ。彼の言動が観客に連

想させるのは、エジプトの人々の伝統的な良心のあり方であって、とりわけ政治化したイスラムではない。しかしながら、彼の体現する伝統的な価値観が、イスラムとまったく無関係ではないことがいくつかの場面から明らかにになる。

初めにこの意味でのイスラムが姿を現すのは、例の助教授と競い合つてアブラの気を引こうと、カジュアルな服を買いこみ、親に車をねだり、学業をおろそかにしているハラフを、カイロに出てきた父親が茶店でたしなめる場面である。<sup>16</sup>「車を買ひ与えるために、土地を一フェツダン売つたのだ」と父親は言う。土地に強い執着を持つ農民にとつてそれだけの土地を売るといふことが、経済的にも、精神的にもどれほどの犠牲であつたことは察して余りある。父親の言葉を聞き、ハラフは自らの軽率な行動を悔いるが、まさにそのとき、近くのモスクから礼拝の時刻を告げるアザーンが聞こえてくるのである。アザーンに誘われ、父と息子は礼拝をしにモスクへ向かう。それに続いてカメラは、モスクのミナレットを下から上へ仰ぐようなショットで映し出す。一度は「アメリカ」に幻惑された主人公ハラフが、「アメリカ」の呪縛から解放たれ正気に返ること、それがイスラムへ帰つていくことと結び付けられている。

もうひとつ、イスラム的な要素が登場するのは、ハラフの友人の恋物語のなかである。ハラフはフセインとアリーという同郷の二人の友人と同じアパートに生活している。この二人にもそれぞれに恋物語がある。アリーにもラミヤという女性との話があるが、重要なのはフセインの方だ。<sup>17</sup> 彼は穏やかで誠実な人柄であり、三人の中でいつもまとめ役である。彼はふとしたことがきっかけで、隣のアパートに住む

女性と恋に落ちる。この女性は、作品の中に登場する、唯一のヘジャール姿の女性である。つまり彼女は、外に出るときは髪をベールで覆い、服装も体の線の出ない、ゆつたりとしたものを身に着けている。その服装を見ただけで、観客はこの女性がイスラムの規範に従つて生きていくことを知る。

フセインは一張羅に身を包み、友人二人に伴われて隣家に出向き、同居している彼女の兄に妹との結婚の承諾を求める。しかしながら兄は、まだ定職にも就くこともできないでいる男からの求婚などまったく相手にせず、問答無用の態度を見せる。もしも彼女がイスラム教徒としての正しい生き方を、父や兄の命令に従ふことと考えたならば、これですべては終わりのはずである。しかしながら彼女は、兄の意思に反してでも、自分が愛する男との結婚を決意し、アリーとハラフの手を借りて家を抜け出し、友人たちが集まる中で婚約式を行つてしまふのである。

現実には、このような大胆な行動はそう簡単には取りえるものではない。そうであるだけに興味深いのは、作品が彼女のこの行為を非常識な行為として否定しないどころか、共感をもつたタッチで描いているという点である。言い換えれば、観客はフセインが彼女と結ばれることを期待し、二人に手を貸す友人たちの姿に厚い友情を見出すと想定されているのだ。作品の最後には、この結婚に反対していた兄が、満足げな様子で妹、フセイン、そしてハラフたちと一緒に食事をしていく場面が登場し、この結婚が結局うまく行ったことを観客は知らされる。

アメリカ大学の学生、アブラがアメリカかぶれの助教授に恋をし、

キャバレーで歌うラミヤが金目当ての結婚を選んだのとは対照的に、ヘジャーブ姿の彼女だけは、一度たりとも金にも地位にも名声にも目を奪われることがない。彼女だけが、財産も肩書きもない一人の男の人格的なすばらしさを見て取り、人間として大切なものを見極めることができたとされているのである。このことは、平均的なエジプト人の間で共有される良識、知恵、良心といったものが、イスラームと分かちがたいものと見なされていることを示している。

##### 五、〈われわれ〉のイスラームとは

ここでクトゥブの発言に戻ろう。彼はアメリカの特徴を「原始性」という言葉に要約した。彼はアメリカ人の性に関する感覚のみならず、宗教観、服装や音楽の趣味、スポーツの楽しみ方もすべて、原始的であると言い放つ。彼がそれに対比させたのは、「文明」という概念だ。もちろん、文明という概念にはさまざまな解釈がありうる。もしも科学技術の発達や物質的な豊かさを文明の尺度とするならば、アメリカこそが文明を代表する国ということになるだろう。しかしクトゥブのいう文明とは、そういう意味ではない。彼にとつてほんとうの文明とは、精神性の高さであり、欲望をコントロールする道徳、それに基づいた秩序である。言い換えると、それは人間と動物を本質的に区別するものである。イドリースの場合も、〈われわれ〉のものであるイスラームに具体的に何を求めるかという時点でクトゥブと袂を分かつにせよ、アメリカの物質文明を非人間的なものとして否定した点ではクトゥブとまったく同じであった。

「原始的」という言葉を使うか否かは措いて、『アメリカ大学のサイーデー』に拍手喝采を送った観客たちもまた、クトゥブの感覚をかなりの程度、共有していることは確かである。規範や道徳という観念を失い、欲望のままに生きることを、〈われわれ〉は許容しない。そのよな振る舞いをしないのが、〈われわれ〉である。あの映画を見た人々の多くは、そうした思いを抱いたに違いない。アメリカ大学というエジプトの中の小アメリカ、そしてとくにアメリカかぶれの軽薄な助教の姿に〈他者〉を見、それと対峙する主人公ハラフの姿を通して、〈われわれ〉とは誰であるかを確認するという経験をしたのである。

〈他者〉としてのアメリカをこのように均質的な、一枚岩の存在にしてしまうことが、真のアメリカを理解することから程遠いことは言うまでもない。クトゥブやイドリースも、それを理解していなかったわけではないだろう。誤解をしてはならないのは、彼らが目指したのは、アメリカの実像を解き明かすことではなく、〈他者〉「アメリカ」の像をはつきりと提示することによって、それに対抗するものとしての〈われわれ〉像を確立するという試みなのである。

とはいえ、〈他者〉をひとつのものとして描き、その中にある多様性や差異を無視することが、〈われわれ〉の描写においてもまた、同じ危険につながる可能性を生むことは否めない。物質主義的で、非人間的な「アメリカ」に対して、こちらは「イスラーム」さえ掲げれば、すべての問題が解消するという安易な結論につながりかねない。ここに取上げた三つの事例がすべて、〈われわれ〉のものとして「イスラーム」を掲げていることは、あたかもそれを裏付けているかにも見える。

しかしながら、ここで挙げた三つの事例によって示された「イスラーム」

は、その中身をよく見てみると、それぞれに大きな差異を見せていることに気づかされる。クトゥブの「イスラム」は男女の役割分担に基づいた秩序ある社会を生み出すものというイメージが強いのに対して、イドリースのそれは人間一般を物質の支配から解放する力とでも言うべきものであった。そして『アメリカ大学のサイーデー』に姿を現す「イスラム」は、普通の人々の良心、良識を根底で支えるものと位置づけられていた。一言に「イスラム」と言っても、そこに託されるものは実に多様である。彼らは「アメリカ的」なるものに対抗する（われわれ）の価値として「イスラム」という同じスローガンを掲げながら、そこに止まることなく、「イスラム」とは何か、そして「イスラム教徒」として生きるとはいったいどういうことなのかをそれぞれに問い続けているのである。

## 註

1 アメリカが代表する西洋近代とは、イスラム世界の人々の目にどのようなものと映っているのだろうか。重要なのは、それが合理化、科学・技術化、都市化、個人化といったものの総体、かつそれに基づいた生活様式であるだけでなく、キリスト教を背後に持つ西洋が拡張し、最終的には政治的なものとしてであれ、文化的な形を取るものであれ、植民地支配として姿を現したということである。現実の歴史の中でイスラム世界の人々が実際に経験したものである。西洋近代とは、常に負の意味に傾く可能性を持っていた。

その中でアメリカが突出した存在となったのは、歴史的には新しい

現象である。アメリカをイスラム世界の人々にとつて、「本来的に」敵対的なものと捉えるのはゆがんだ見方にほかならない。しかしながら、大きな枠組みで捉えた場合、アメリカが植民地支配の記憶とつながる西欧諸国とは異なり、自由の国として期待を寄せられた時代はほぼ終焉し、今日ではアメリカのイメージが近代史上例を見ないほどの否定的なものになっていくことは確かである。

2 実際にはいくつかの詩集の他、『農村の子供』という自伝的な小説も発表している。

3 この留学は、教育相に勤めながら、政府を批判するような発言を繰り返すクトゥブを厄介払いするとともに、アメリカを体験させることによって、親米的な方向へ導こうとする当局の思惑があったとされる。しかしその思惑がまったくはずれることは、これから論ずるとおりである。

4 もちろんこの時代にアメリカを訪れたすべてのイスラム教徒・エジプト人がアメリカに対する反感を持って帰ってきたわけではない。たとえばカイロ大学哲学教授であったザキー・ナギーブ・マフムードなどは『アメリカでの日々』において、アメリカ人に対してかなり好意的な描写を行っている。Zaki Nagib Mahmud, *Ayyām fī Amrīkā*, Cairo, 1955.

5 *al-Risāla*, No.957, 1951 Nov. 5; No.959, 1951 Nov. 19; No. 961, 1951 Dec. 3.

これ以降、『アル＝リサーラ』誌では二週に一回の頻度で巻頭記事を書くようになった。

6 *Amrīkā min al-Dākhil bi-Minzār Sayyid Qutb*, p.112~p.113. 『アル＝リサーラ』誌に掲載された文章には、小見出しは存在しない。

7 *Amrīkā*, p.113-114.

- 8 Sayyid Qutb, 'Islām huwa al-Hadārah', *Ma'lim fi Tarīq*, Beirut 1988, p.123-124.  
 文章中の括弧は原文のまま。
- 9 クトゥブが、女性に社会の「イスラーム性」を顕在化させるための特別な役割を期待していることは否めない。一般に、男性と比較して女性は、その振る舞いや服装が集団の指標とみなされ、その結果、集団の課す規範を男性よりも厳格に遵守することを求められる傾向がある。これは重要な問題であるが、紙幅が限られており、ここでは論ずることはできない。
- 10 Yusuf Idrīs, *Nyū York 80*, Cairo, n.d., p.30.
- 11 Yusuf Idrīs, *Islām biā Dīfāf*, Cairo, 1989, pp.17.
- 12 村人とともにCNNの画面が映し出されるこの場面は、非常に印象的だ。ガラビヤという、カイロではもう少なくなった伝統的な服を着て、頭にターバンを巻いた村人たちが、ラリー・キングの番組を見ている。要するに、この場面は主人公ハラフの家族が外国のことなど何も知らない、外国かぶれからはもつとも遠い、エジプトの庶民の代表的な存在であることを知らせるだけでなく、これほどの田舎にも、衛星放送は届いており、アメリカからの情報が日々、送り続けられていることを印象付ける二重のメッセージとなっている。
- 13 現実には、アメリカ大学に奨学金で入るなどということはない。これはまさに、地方出身の純朴な青年と都会のアメリカかぶれの人々の対照を際立たせるための装置である。
- 14 たとえば、主人公は自分の名はハラフではなく、ハラフ・ダフシューリー・ハラフであると固執するが、これは出自が明確であることを誇りにする伝統的な価値観の代表である。
- 15 この作品が公開された一九九八年はイスラエル建国五十周年であり、そのことが人々の意識を高めていたと想像される。作品の中でもこの
- 16 学生集会は、五十周年の機会を捉えたものと設定されている。またこの場面に先立って、作品の中では繰り返し、アフマドの口を借りて、パレスチナ問題が言及されているだけでなく、家をイスラエル軍に破壊され呆然とたたずむ老女、傷ついた子供を抱きかかえる父親、銃を構えるイスラエル兵に右で立ち向かうパレスチナの青年たちの様子を映し出すテレビ画面が、かなりの長さで登場する。この時点で観客のパレスチナに対する共感は、すでに呼び起こされているのである。
- 17 ハラフの文化的背景が、古きよきエジプトのそれであることはこの車に関する場面でも見て取れる。すぐに農村の出身だとわかる服装をした同郷の村人たちがなんと七、八人がかりで、新しく買った車をハラフのところまで押してくるのだ。彼らが運転の仕方を知らないというのではない。この車はハラフのために父親が買ったものだから、最初に運転する榮譽はハラフのものでなければならぬと律儀に考えるのである。その様子はあまりにこっけいであるが、それと同時にそこまで人の心を思いやる人々の心のあり方に、観る者は笑いを誘われながらも感動するという仕掛けになっている。
- 18 当初二人はともに、ラミヤに恋心を抱いている。歌手を目指すアリーは、ラミヤに誘われ気が進まないながらキャバレーで歌うようになるが、彼女はそこで知り合った金持ちの男に見初められ、金目当てでその男との結婚を決め、彼は捨てられる。酒場で歌い、金目当てで結婚する女が、「イスラーム」と正反対の価値を象徴することは言うまでもない。